2Up-9

家族間に嫉妬がある場合の経済学的考察

森　英子　（鈴峰女子短大）

動機　戦後の輸入思想の平等主義が、能力の劣る者に対するいじめ、傑出する者への嫉妬の激化等、現在は嫉妬の時代ともいわれる。嫉妬の原理は、心理・社会・経済学的見地において共通であるが、特に、家族人間関係中心に、経済学的視点から考察する。

方法　家族経済学の創始者、G・S・ベッカーの「A Treatise on the Family」（1992）の特に第８章「Altruism　the　Family」を中心に紹介し、考察する。

紹介考察　嫉妬の第一法則－嫉妬者は、嫉妬収入を最大化することを欲する。即ち、自身の収入と、嫉妬の相手（犠牲者）の収入差を拡げることをひたすら作為する。特に、犠牲者の収入が、彼の収入より多く減少するのであれば、自身の収入減少を許容し、また、自身の収入が、犠牲者のそれより多く増加することを望む。

嫉妬収入　$Re = Ie - Ik = Ze - Zk$

I　収入　　Z　消費　　e　嫉妬者　　k　犠牲者

嫉妬の第二法則－すべての犠牲者は、嫉妬者の嫉妬収入と効用の最小化を望む。即ち、犠牲者達は、彼らの収入と嫉妬者の収入差を縮める作為をひたすら行なう。特に、各犠牲者は、嫉妬者の収入が、より多く減少するのであれば、或は、他の犠牲者達の収入がより多く増加するのであれば、彼等の収入を減少させるだろう。

先立って、考察した利他主義では、利他者と受益者間に、協力関係が生まれるのに対して、嫉妬は、嫉妬者と犠牲者間に、争いを生じる。ただし、犠牲者間には協力関係を生む。嫉妬の、最もおそるべきは、家族全体の総収入と総効用について顧みないことである。